

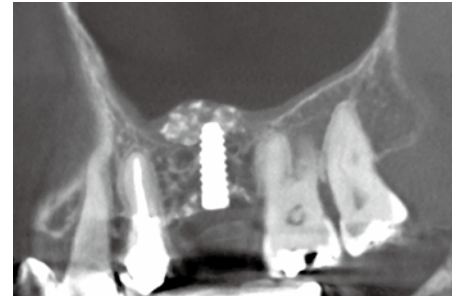
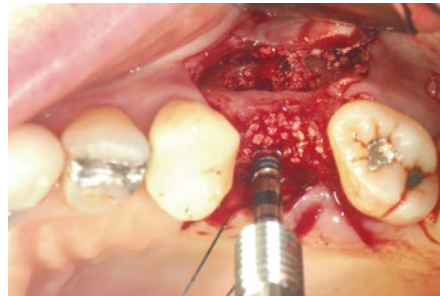
# 侵襲の少ない上顎洞底挙上術を目的とした ラテラルスリット法

笹尾 道昭<sup>i)</sup>+和田 猛<sup>ii)</sup>+佐藤 正弘<sup>iii)</sup>

i) 笹尾歯科医院 (埼玉県和光市)

ii) わだ歯科クリニック (山梨県甲府市)

iii) なごみ歯科医院 (東京都足立区)



従来のラテラルアプローチの上顎洞底挙上術は、上顎骨頬側骨壁へラテラルウインドウを形成するために、術野確保の大きな切開、口角鉤での過度の牽引、術後の腫れなど、患者への侵襲と負担が多い術式であった。

一方、クレスタルアプローチの場合は、オステオトームテクニックに代表される槌打による不快な衝撃や、多くのテクニックが総じて洞底部への盲目的なアプローチ法であるため上顎洞底粘膜の損傷リスクがあった。

これらのマイナス要因は、上顎洞底挙上術の積極的な応用を妨げるものであり、歯科インプラント治療の適応範囲を狭めていたと考えられる。

そこで筆者らは、ラテラルアプローチおよびクレスタルアプローチ各々の術式の利点を融合させることで、より確実に侵襲の少ない上顎洞底挙上術が可能ではないかと考え、その考え方に基づいた術式「ラテラルスリット法」を応用したところ、良好な結果が得られたので報告する。